



ISSN 2185-9787

さやばね

ニューシリーズ

No. 2 Jun. 2011

日本甲虫学会

SAYABANE N.S.

The Coleopterological Society of Japan

日本の甲虫学研究史

〔新甲虫学会第1回大会特別座談会〕

司会：大林延夫

話題提供者：上野俊一・森本 桂・渡辺泰明

(この内容は、2010年11月13日に大阪市立自然史博物館で開催された第1回日本甲虫学会大会の特別座談会の内容を録音し、テープ起したものです。録音状態が悪くて聞き取ることが困難な部分、話の順序が分りにくい所、内容が重複する部分などは、編集の方で適宜判断して書き改めた部分がある点をご了解ください。なお、文章中、発言者の敬称は省略させていただきます。)

大林：それでは、今日のメインイベントであります、「日本の甲虫学研究史」ということで座談会をこれから開催させていただきたいと思います。お話をいただくのは今日の総会で新甲虫学会の名誉会員として推薦されました上野先生、森本先生、渡辺先生のお三方です。お話の流れとしては、戦前、戦後と大きく分けようと思っています。戦前の話ということでは、たぶん、一番年長の上野先生でも終戦の年に15歳ぐらいですから、その頃のことを実際にご存知では無いと思いますが、戦後になってからのお付き合いもあった中でいろいろ話が出てくれれば良いと思っております。具体的にどんな話をしようかなど、細かくはご相談をしておりませんので、内容は始まってからのお楽しみということにさせていただきます。戦前の研究の流れのほうは森本先生のほうでざっとおまとめいただいております。そんなことで、先生方どうぞ壇上へ。

まずは戦前の研究史ということで、最初に森本先生のほうから戦前の話を少ししていただいて、それから他の先生方にもいろいろお話を進めていただきたいと思います。

森本：日本の昆虫で、初めて学名が与えられた

のは1775年、ファブリシウス (Fabricius) のオオゾウムシ *Curculio gigas* です。続いて、ドイツ語読みでツンベルク (Thunberg) と発音しますが、チュンベリーと本当は言うそうですが、チュンベリーが日本に来まして、1775年～76年にキャプターと一緒に長崎から江戸まで旅行しており、その時持ち帰った採集品が、何回かにわけて報告されております。その一つが、ヒメカメノコテントウとナミハンミョウとか、リンゴカミキリとかというものです。続いて、あのシーボルト (Siebold) が1823年～28年、長崎に滞在して、いろいろな動植物をたくさん採集しておられます。この採集品はライデンの博物館にあって、それをいろいろなヨーロッパの研究者が、まとまったシーボルトのコレクションという意味ではなくて、いろいろな論文の中にバラバラと記載しています。これが、チュンベリーの報告の論文です (図1)。

左が表題で、右がそれについている図版です。それで、これがヒメカメノコテントウの原記載に付いている図です。この図版自体が、ほとんど虫の実物大ですから小さな図です。これがナミハンミョウの原記載の図で、これがヘビトンボです。ここに日本から記載された *Coccinella octopunctata* というテ



図1. チュンベリーの報告. 左: 表題, 右: 図版.

大林: それでは、今日のメインイベントであります、「日本の甲虫学研究史」ということで座談会をこれから開催させていただきたいと思います。お話をいただくのは今日の総会で新甲虫学会の名誉会員として推薦されました上野先生、森本先生、渡辺先生のお三方です。お話の流れとしては、戦前、戦後と大きく分けようと思っています。戦前の話ということでは、たぶん、一番年長の上野先生でも終戦の年に15歳ぐらいですから、その頃のことを実際にご存知では無いと思いますが、戦後になってからのお付き合いもあった中でいろいろ話が出てくれればいいと思っています。具体的にどんな話をしようかなど、細かくはご相談をしておりますので、内容は始まってからのお楽しみということにさせていただきます。戦前の研究の流れのほうは森本先生のほうでざっとおまとめいただいております。そんなことで、先生方どうぞ壇上へ。

まずは戦前の研究史ということで、最初に森本先生のほうから戦前の話を少ししていただいて、それから他の先生方にもいろいろお話を進めさせていただきたいと思います。

森本: 日本の昆虫で、初めて学名が与えられたのは1775年、ファブリシウス (Fabricius) のオオゾウムシ *Curculio gigas* です。続いて、ドイツ語読みでツンベルク (Thunberg) と発音しますが、チュンベリーと本当は言うそうですが、チュンベリー

が日本に来まして、1775年～76年にキャプターと一緒に長崎から江戸まで旅行しており、その持ち帰った採集品が、何回かにわけて報告されております。その一つが、ヒメカメノコtentウとナミハンミョウとか、リングカミキリとかというものです。続いて、あのシーボルト (Siebold) が1823年～28年、長崎に滞在して、いろいろな動物をたくさん採集しておられます。この採集品はライデンの博物館にあって、それをいろいろなヨーロッパの研究者が、まとまったシーボルトのコレクションという意味ではなくて、いろいろな論文の中にバラバラと記載しています。これが、チュンベリーの報告の論文です (図1)。

左が表題で、右がそれについての図版です。それで、これがヒメカメノコtentウの原記載に付いている図です。この図版自体が、ほとんど虫の実物大ですから小さな図です。これがナミハンミョウの原記載の図で、これがヘビトンボです。ここに日本から記載された *Coccinella octopunctata* というtentウムシがあります。この *octopunctata* は、ヤホシといたいところですが、実は、 Junk (Junk) のカタログだとか、今までのtentウムシの研究者、ウインクラー (Winkler) だとかイアプロコフー クンゾリアン (Iabrokoff-Khnzorian), 佐々治など、すべての人がこれを無視して、以降の記録に出てこない謎のムシでございます。これを見ると、なんとなくナミtentウのある型かもしれないという気もしますが、私自身、これにピ

D. D.
**MUSEUM NATURALIUM
ACADEMIÆ UPSALIENSIS.**

CUJUS
PARTEM QUARTAM.

CONSENSU EXP. FAC. MED. UPSAL.

PRÆSIDE

**CAROL. PET.
THUNBERG,**

EQUITE AURAT. REG. ORD. DE VASA.
MEDIC. DOCT. PROFESS. MED. ET BOTAN. REG. ET ORD., ACAD. CAESAR.
NEP. CURIAE, REG. SCIENT. HOLLANDICAE, SOCIET. SCIENT. UPSAL. PATR.
HOLM. REGAL. NAT. SCIENT. LOND. HARLEM. AMSTELD. ZELAND. NIDROBIC.
MEDIC. EDINBURG. ET NAT. STUDIOS. ISID. MEMBERO; NEC NON ACAD.
MONSPELIENS. AGRICULT. PARIS. FLORENTINAT. BATAVIN. IND.
OIL. CORRESPOND.

Pulicis examini subijcit,
PETRUS A BJERKËN,
Sip. Leijell. Angermannus.

IN AUDIT. GUST. MAJ. D. XIX DEC. MDCCCLXXXVII.
H. A. M. S.

UPSALIÆ, LITTERIS DIRECTOR. JOH. EDMAN.



Saperda oculata,
japonica, 10),
ferruginea, 11),
cylindrica,
livoreis,
fulvaris, α. β.
tremula,
cardui,
populnea,
carboaria, α. β.
prausta,
punctata,
lutea, 12),
6-notata, *)
4-oculata, 13),
fulva, 14),
nebulosa.

Cerambyx longimanus, α. β.
maxillojus, α. β.
coriaceus,
faber,
deffuricus,
cinnamomeus,
Rubus, α. β.
succinifus,
cardo, α. β.
textor.

10) Lutea thorace imm
que excepta basi nigris.
11) Tota ferruginea a
bido cinguloque in medi
12) Corpore cylindric
ce bidentatis nigris.
13) Corpore cylindric
tuor nigris, capite elytris
*) Corpore cylindric
ginalibus sex flavis. Fig.
14) Corpore cylindric
nibus nigris, capite elytr
15) Lamia nebulosa F
16) Lamia oculator F

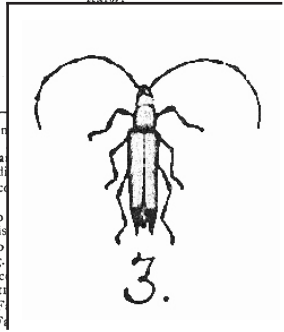


図2. チュンベリーへの報告, 右下: Fig3拡大図.



CATALOG
DER
COLEOPTEREN VON JAPAN
MIT ANHANG
DER BEZÜGLICHEN BESCHREIBUNGEN UND DER
SIEBER BEKANNTES FUNDORTE.
HERAUSGEGEBEN
VON
H. V. SCHÖNFELDT.

図3. 左: ルイスの採集した足跡. 右: シェーンフェルトによる日本産甲虫のカタログ.

日本の甲虫研究に一番大きな影響を与えたのはルイス(Lewis)です。ルイスは日本に2回来まして、1864年~72年と1880年~81年に、四国以外の日本全土、千島から鹿児島まで、ずいぶん広い範囲にわたって採集しております。これが、ルイスの歩いた足跡でして、ベーツ(Bates)の論文の中にこの地図とこの日程表が出ておりますので、ご存知の方があられるかもしれません(図3左)。

それで、その採集品に基づいて、当時のヨーロッパの甲虫の研究者が、次々に大きな論文を書きましたが、日本の甲虫の種類の多さにヨーロッパの研究者が驚いたということです。ルイスの第1回の採集品が一応片付いた頃、1879年にルイス自身

が日本産甲虫のカタログを編纂して2,227種を載録し、カタログの末尾にはこれの追加をしたいので日本の甲虫について書いた人は別刷を送って欲しいと書いてありますが、追加は出来ませんでした。

明治維新、明治元年は1868年ですが、明治になって新しい日本の政府は、ヨーロッパから多くの技術者や先生などをたくさん招聘しました。その人たちの中に、デーニッツ(Dönitz)、ヒルゲンドルフ(Hilgendorf)、ヘラー(Heller)、レンツ(Lenz)、ライン(Rein)、ファンフォルセム(Van Volxem)というドイツの人たちがおりました。この人たちの採集品というのは、ミュンヘンに集まり、ハイデン(Heyden)、ハロルド(Harold)、ライター(Reitter)、レロフス(Roelofs)らによって報告が出ております。ルイスの採集品にこれらの結果を加えて、シェーンフェルト(Schönfeldt)が、1887年に日本産甲虫のカタログを書き、1897年までに3回追加をして、3,783種をリストアップしています。これが、シェーンフェルトの表題です(図3右)。

その後、アルマン(Harmand)が1894年~1906年にフランス大使館の公使として、またガロア(Gallois)[ガロアムシでも知られ、たくさん日本の甲虫で名前がついています]が1903年~1918年に同大使館の通訳、副領事として日本に滞在し、東京付近や軽井沢の付近などでたくさん採集しています。これらは、パリの博物館に送られて、たくさん報告が出ております。これが日本の研究

者が研究を始めるまでの主な外国人の業績です。

戦前の甲虫研究 (1) 黎明期

1888	動物学雑誌創刊
1897	名和 靖 (名和昆虫研究所) 「昆虫世界」
1905-43	新島善直 主にキクイムシ
1923, 27	新島善直・木下栄次郎 日本産コガネムシ
1923-39	鹿野忠雄 多くの地域目録, 動物地理
1925-35	村山醸造 主にキクイムシ, コガネムシ

つぎに、日本人がいつから研究を始めたのかということですが、日本人で初めて甲虫を記載したのは新島善直さんでキクイムシの1905年の論文です。その後、新島さんは1923年と1927年に木下さんと一緒に、日本産のコガネムシ、一つの科としては大きなものですが、初めてコガネムシをまとめております。その材料は、当時の全国の尋常小学校に手紙を出して、各地小学生に標本を採ってもらって集めるという方法でコガネムシ類をまとめたわけですから、目に付く大きな虫というのは大体揃っていますが、ビロードコガネのようなものとかはかなり抜けています。鹿野忠雄さんは、分類学者というよりは、生物地理学者で、あっちこっち行ってけっこうたくさん報告を書いており、村山醸造さんも1925年からキクイムシの論文を書いています。新島さんも村山さんも北海道大学ですが、林学のほうの方です。

戦前の甲虫研究 (2) 図鑑類

松村松年	
1904-07	: 日本千虫図解 1-4 巻
1909-12	: 続日本千虫図解 1-4 巻
1913-21	: 新日本千虫図解 1-4 巻
1930	: 増訂日本千虫図解 1-2 巻
1925-33	: 日本通俗昆虫図説 1-5 巻
1931	: 日本昆虫大図鑑
横山桐郎	
1930	: 日本の甲虫
1931	: 続日本の甲虫
平山修次郎	
1933	: 原色千種昆虫図譜
1937	: 原色千種続昆虫図譜
1940	: 原色甲虫図譜
安立綱光・神谷一男	
1933	: 原色甲虫図
加藤正世	
1933-34	: 分類原色日本昆虫図鑑 12 巻
内田清之助(編)	
1932	: 日本昆虫図鑑
江崎悌三ら	
1940	: 原色日本昆虫図説

日本では実によく図鑑が出版されています。松村松年さんがこれだけたくさん図鑑を出しましたし、横山さんが「日本の甲虫」という本を2冊出しています。これは、非常に値段が高かったということです。この付近までは手で書いた図版ですが、ここからカラー写真が入ってきます。これは印刷技術でカラー写真の図版が安くできるようになったということだろうと思います。平山修次郎さんが「原色千種甲虫図譜」と、その続編を出し、また甲虫のところだけ抜き出して、「原色甲虫図譜」という本を出しました。また、安立さんと神谷さんが「原色甲虫図」を出しました。加藤正世さんの「分類原色日本昆虫図鑑」は12巻ですが、そのうちの2巻が甲虫です。それから、松村さんの「日本昆虫大図鑑」が1931年、北隆館からは1932年に「日本昆虫図鑑」が出ました。ちょうど企画がだぶって1年おきにでっかい図鑑が2つ出たわけです。そういうことがあって北隆館の図鑑では北大の研究者がシャットアウトされたということです。

甲虫のほうは、1938年、三輪勇四郎さんが、「日本甲虫分類学」というのを書いています。これは、フォウラー (Fowler) の「Fauna of British India」に出ました、General introductionの体系がそのまま使われています。フォウラーの分類体系というのは、当時世界の標準の昆虫学教科書でありましたイムス (Imms) の「A General Textbook of Entomology」の中にそのシステムが取り入れられたために、当時の世界の標準の分類体系となりました。それから、三省堂から日本動物分類がシリーズで出版されましたが、これは日本語で書かれたモノグラフで、当時としては非常によくまとまったものです (図4右)。

1936年から40年にかけて「日本産鞘翅目分類目録」8冊が台湾から出版されました。ユンクのカタログが出て世界の情勢がわかったところに日本の

戦前の甲虫研究 (3) 単行本・雑誌類の創刊

1938	日本甲虫分類学 三輪勇四郎
1936-42	日本動物分類 [鞘翅目] 12冊 三輪・河野・中條・神谷・玉貫ら
1939-40	日本産鞘翅目分類目録8冊 三輪, 中條, 水戸野
1926	「昆蟲」東京昆虫学会
1926	「Insecta Matsumurana」北海道大学
1930	「むし (後のMushi)」九州大学
1933	「昆蟲界」昆蟲趣味の会
1937-41	「日本の甲虫」甲蟲同好会

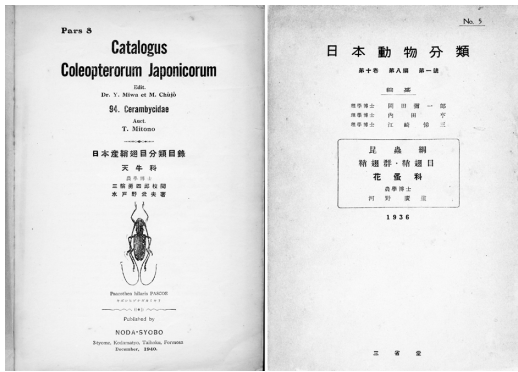


図4. 左：日本産鞘翅目分類目録，右：日本動物分類.



図6. 左：「昆虫界」の表紙，右：「蟲の世界」の表紙.

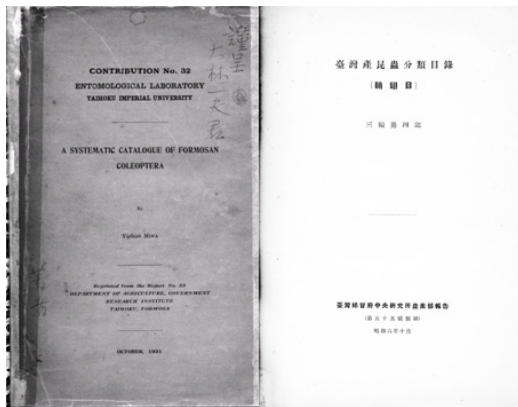


図5. 台湾産昆蟲分類目録.

情報を加えて、カタログを作ろうとして始まったのですが、8冊で戦争となり、終わってしまいました。この頃、次々に昆虫関係の雑誌が出ましたから1930年代というのは日本の昆虫研究、甲虫も含めて非常に盛んになった時代でした。これが、日本の甲虫の鞘翅目目録の1冊、カミキリムシ科の表紙です(図4左)。私の持っているのは、いろいろな経緯がありますが、関 公一さんの判子が押してあります。この分類目録の中でもカミキリムシは、非常な力作です。

それで、台湾産昆虫分類目録というを台湾の人たちが出しましたし、当時としては、各最後に文献目録も付いていまして、非常に役立つものです(図5)。

これもあの加藤正世さんが発行していた「昆虫界」ですが、このなかには甲虫の特集号が何冊か

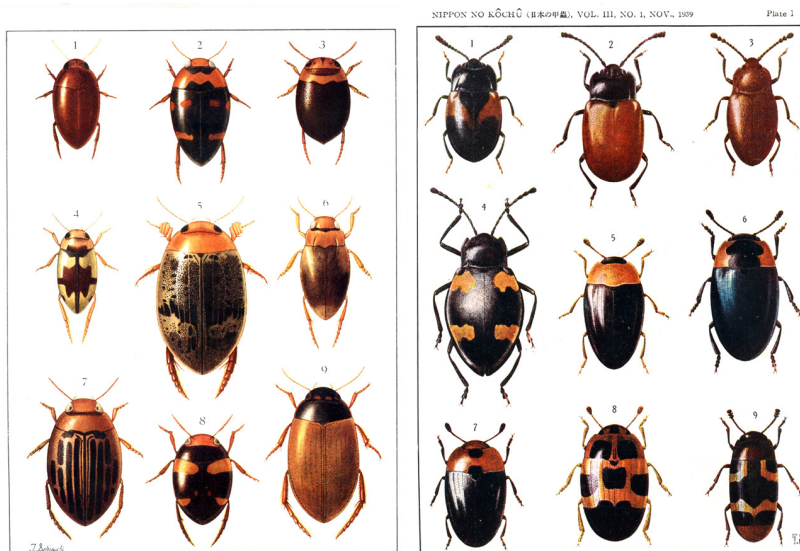


図7. 「日本の甲虫」の原色図版. 左：ゲンゴロウ科，右：オオキノコムシ科.

ありまして、それにカラーの図版が載りました(図6左)。これはアカガネサルハムシ、こんな綺麗な図版が載った最初のもです。それが「蟲の世界」、これ平山修二郎さんが中心となって始めたものでして、これはクワガタムシの写真だとかんかがよく載るものです。それでフタオチョウの写真だとか、珍しい標本の写真がよく載っています(図6右)。

「日本の甲虫」とい

うのは、これは東京農大を中心にして発行された雑誌で、最初あけたところに見事な甲虫のカラーの図版が付いておりまして、これ非常に見ても楽しく、当時としては非常に立派なものでした(図7)。

それで、戦争前の主な甲虫の研究者というのは、北海道大学でこれだけの研究者がおりました。

戦前の甲虫研究(4) 主要研究者

北海道大学

河野廣道, 三輪勇四郎, 大田勇愛, 土井久作,
新島善直, 村山醸造, 松下真幸, 玉貫光一,
滝沢 求

東京農業大学

横山桐郎, 安立綱光, 神谷一男, 大林一夫,
澤田玄正, 野村 鎮, 山本 玄, 高木三郎

台湾大学

三輪勇四郎, 中條道夫, 水戸野武夫

その中には、松村松年の門下の農学部の方と、林学の方たちがおります。それから、三輪さんは台湾に行って、台湾で活躍されています。東京農大も非常にたくさんの研究者が輩出しまして、横山桐郎さん、安立綱光さん、神谷一男さん、大林一夫さん(図12右)、澤田玄正さん、野村 鎮さん、あとの山本 玄、高木三郎、このお二人の方は少し報告を書いて、それで、戦争中、中断しております。それで、台湾大学、当時の台北帝国大学では、三輪勇四郎さん(図9)、中條道夫さん(図8)、水戸野武夫さん、これは大学と農業関係の中央農業研究所というのが隣り合わせの建物にあって、渡り廊下のところで繋がっており、標本室も隣にあって、農業試験場のほうの標本室には甲虫と蜂が入っていて、大学のほうはその他のファミリーということで、2つの全く違う組織を一緒にして、非常に



図8. 中條道夫.



図9. 三輪勇四郎.

うまく運営するということが、台湾で行われておりました。

大林: ありがとうございます。今、ざっと戦前の流れについてお話をいただきました。で、先生方に戦前の昆虫学に関する話題を提供いただければと思いますけれども、渡辺先生には農大関係で少しお話をいただけるとありがたいと思いますが。

渡辺: 今そこに横山先生以下、高木三郎さんまでの名前が上がっておりますけれども、先ほど森本先生からお話がありましたように、横山先生は「東京虫の会」を設立いたしまして、季刊誌として「蟲」という雑誌を出したわけですね。その東京虫の会の幹事役が神谷先生、安立先生、それから箕面の昆虫館で戦後長く館長をやっておられました滝尾増夫さん、この三人が幹事役で東京虫の会を運営していた、ということでございます。ただ残念なことに横山先生はたいへん短命で、昭和7年(1932年)に亡くなられてしまうんですね。これがその写真ですけども、当時はこのように採集べ



図10. 横山桐郎.

ルトを腰に巻いて昆虫採集に出かけていったのです(図10)。

「蟲」は結局4巻まで発行されましたが、横山先生が亡くなって終刊になってしまう訳です。その後、その会をそのまま無くすのは勿体ないんじゃないか、ということで、少し後に加藤正世さんが作った「昆虫趣味の会」と一緒になったらという計画もあったようなんですが、横山先生の設立意志と違うということで合併は行われず、しばらくして、神谷先生と安立先生が中心になって「甲虫同好会」を設立した訳です(図11)。



図11. 左：神谷一男. 右：安立綱光.



図12. 左：沢田玄正. 右：大林一夫.

で、その季刊誌が「日本の甲虫」です。先ほどすばらしい原色の図版が紹介されましたけれども、あれは関口俊雄さんの肉筆で、献身的な努力でもって、こういう原色図を無償で提供されていたというふうに書かれています。これは立派な紙で、立派な印刷なんですけれども、じつはトンボで有名な奥村定一さんの紹介で凸版印刷にかけあい、凸版印刷の植字工が仕事の片手間に活字を拾い、このような立派な雑誌を作ることが出来たのです。しかし東京甲虫同好会も結局、その後戦争の影響を被って発行停止になりました。

先ほど、森本先生の話の中で、言い忘れてたんじゃないかなという気がするんですけれども、神

戸に先ほどのジョージ・ルイスと同じ名前の人が居たんですね。その人は神戸に在住していて、神戸の篠原だとか原田ですか、今ではまったく見る影も無いような都市化した状態になっておりますけど、そこでたくさんの昆虫を採集して、それを世界中の専門家に送って同定を依頼したんです。で、同定して返ってきた標本がかなりたくさんあって、パラタイプも含まれていたんですけれども、その標本は京都大学に寄贈されて、現在は国立科学博物館にあります。1,300種位だったかな？

それからですね、台湾の水戸野武夫さんは、あるとき突然農大に現れて、何かと思ったら、戦後農大のすぐ傍に住んでおられたんですね。それで僕は知らなかったんですけれど、水戸野さんはですね、最終的には、台湾大学になりましたけれども、高等農林が台中に引っ越したときに台中高等農林専門学校になって、そこで、演習林報告を出してるんですね。それでその昆虫目録を出してるんですけど、その雑誌が農大に無いかということで、見にこられたことがある。その時初めて知ったんですけれども、水戸野さんが高等農林の卒業生で組織している榕畔(ガジュマル)会という会の事務局長みたいところをやられていて、その会の総括をした500ページ以上を越える印刷物の中にですね、中條道夫さんとか水戸野さんの業績目録が全部収録されてます。目録には、タイトルと掲載雑誌、発行年等が掲載されてます。あまり人の目に付かない出版物だと思いますけれども、そういうふうなものがあります。

大林: ありがとうございます。戦前の甲虫屋さんの活躍というと、特に台湾にいらした方々が活躍されてますけれども、上野先生はこの辺の先生方とはどうでしょうか。

上野: 私はね、経歴からいってあまりよく知らないんですよ。私は、京都大学の農学部で昆虫を出たんですけれども、当時の昆虫学教室というのは内田俊郎先生が教授でおられて、それで甲虫と名のつくものは、コクゾウムシしか扱われない。それで私、農学部を卒業した後で、私自身にはどうにもならないと思ったもんですから、理学部のほうに移って、ずっと理学部だけを歩いたんですけれども、こういう先生方との面識がぜんぜんないんですね。ただ大学のまだ学生のころ、さきほど森本先生のお話にあった、大阪で新しい、戦後になってから初めて新しいいろんな会を作ろうと、特にその中心になられた大倉正文さん、それから、

林 匡夫さん、お二人とは、そのころからよく会っていろんなことを教えていただきましたし、こちらからお手伝いすることがあったわけです。ただ、今のような事情で昆虫学教室が厳然とあった東京農大とか、昆虫の人がたくさんおられた北大とかに居た人間とは少し違うんです。森本先生のいらした九州大学も甲虫の人はあまりおられなかったんですね。森本先生が教授になられるまで、甲虫の無い世界だったと思っています。せっかくいろんな人の写真が出たんで、農大関係の人についてご説明ください。

渡辺: 先ほどの写真(図12左)、これは、コガネムシを専門に研究された澤田玄正先生、“げんせい”さんとよくいいますけれども、正しくは“ひろまさ”先生です。我々が、というか多くの方は、澤田先生はコガネムシの分類屋と思われていると思うんですけども、ご本人が、「私は分類屋じゃなくて形態学者だ」ということをさかんに言っておられました。澤田先生の学位論文は、コガネムシの幼虫の形態に関する論文なんですね。そして、澤田先生は神谷先生の直近の弟子で、東京農大昆虫学研究室の後継者であるということです。左が、さきほど、話に出ました澤田先生の上司であった神谷一男先生で、水生甲虫、特にゲンゴロウに関する分類の論文をたくさん書かれています。しかし、神谷先生の学位論文は水生昆虫の論文ではないんです。横山先生が、朝鮮総督府の依頼でマツケムシの防除に関する天敵の研究をされていて、神谷先生がその助手の役割をやられていたんですね。そういう関係で神谷先生の学位論文は、マツケムシの天敵に関する研究だったんじゃないかなと思います。その隣が、安立先生です。これは、わたしの恩師にあたり、日本のハネカクシを専門的に研究をされたわけですが、横山先生もやはりハネカクシに非常に興味を持ってたんです。横山先生は、蚕糸試験場に勤めていて、それから農大に関わられた方なものですから、いわゆる蚕糸に関わるようなことがらをずいぶん研究されてる。確か、学位論文はクワノメイガの生態に関する内容の論文だったと思いますけど、非常にハイカラな先生で、しかも、文才に富んでいて、たくさん随筆集を出されていますね。「蟲の世界を探ねて」とか、「優曇華」だとか。それで、さきほど、「日本の甲虫」の話をした時に編集のことをちょっと言い忘れたかもしれませんが、澤田先生と山本玄さんと、それから大林一夫さんの三人の方が、たしか、その編集をされていたはずですよ。

大林: ありがとうございます。戦後のいろいろな方のお話も伺いたいのですが、戦前の甲虫学の関係者ですね、たぶん、今の若い方はあまり知らないんだと思うんですけども、昔の台湾の素木コレクションについての経緯みたいなのをどなたかお話をいただけますか。

森本: 問題の素木コレクションには、2つのソースがあります。素木先生がロンドンに留学しておられた時に、素木先生がもって帰られた標本が一つ、そして、もう一つは、台湾を日本が植民地にしたあとですから、台湾で大博覧会が開催され、その中で台湾の昆虫も展示されました。台湾というのは熱帯だということで売り込んである訳ですから、きらびやかな昆虫をたくさん並べるという目的で、標本商から東南アジア地域の標本を買い集めて、それを台湾産として展示したということです。展示標本の採集品のラベルで、ある産地のある日付のところはフィリピンであるとかニューギニアであるとか、ということに関係者は知っていたということです。ところが、その標本をこともあろうに加藤正世さんが盗み出して図鑑に図示し、そして、カミキリは、グレスット(Gressitt)さんが中国のカミキリをまとめるときにその加藤正世さんの図鑑から記録を全部引用してしまいました。それで、黒澤さんがなんとなく煮え切らないようなことをごちゃごちゃと「甲虫ニュース」に書いたりしたことがあります。産地と日付を見ると、その標本の産地はあの辺だろうという見当がつかますが、誰も消しておりませんので、記録の上では台湾産になっております。それから、最初にロンドンに留学されたときのコレクションの話というのは、いろんなことがありますが、ルイスが持っていた標本1セットを、ルイスから素木さんが借りたという形で台湾に持ってきたそうです。だから、昔の台湾大学の隣にあった、農場試験場の甲虫のコレクションのところにルイスの標本が1セット入っています。現在は試験場が移転しましたが、その標本も一緒に移転しております。ルイスコレクションは、ロンドンに行かなくても、Holotypeはないかもしれませんが、1セットは台湾にあります。

大林: どうもありがとうございます。当時台湾におられた先生方が皆亡くなられて、これからそういう事情をお聞きする機会がなかなかないものですから、ちょっと、お話をいただきました。ありがとうございます。今、この画面に出ています。

すが、さっき森本先生からお話があったように、戦後の日本の甲虫研究が進んだのは、こういう海外のカタログの発行との関係が非常に深いと思います。

森本: ヨーロッパの甲虫は、世界で一番早くまとまっていて、イギリスだとか、スκανジナビアだとかいろんな地域がまとまってたんですが、1855年～56年に、Jacquelin du Valがヨーロッパ産甲虫の属の検索表と属の記載、およびそれに含まれる種のリストを出しました。これ、4冊の大作ですが、こういうのがヨーロッパで1回出ると、それが元になって、ヨーロッパ中で一気に種のレベルまで研究が進んだわけです。

当時のヨーロッパの研究者の中でも、これはすごい大物で怪物というのがラコールドール(Lacordaire)で、1854年～71年に「Genera des Coléoptères」という本を12巻書きまして、世界の甲虫全部の族・属までの検索表とその記載、及び注釈で属に含まれる種のメモを付け、また13巻目が主要種のカラープレートで、非常な貴重本です。これで世界の甲虫は一旦まとまりました。この写真が、ラコールドールです(図13)。顔つきだけをご覧ください。Coleopterists' Bulletinを出しているアメリカの甲虫学会は、ラコールドールプライズという賞を創設し、その賞の第1号は大原昌宏さんが受賞されたのでご紹介します。

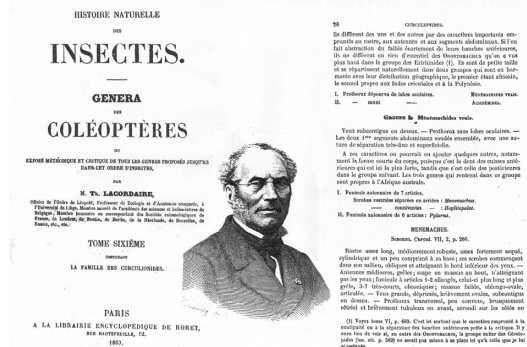


図13. ラコールドールとGenera des Coléoptères.

また、ゲミンガー(Gemmiger)と Harold(Harold)は、1868年～76年に当時の世界の甲虫のカタログを作りました。これは12巻ありまして、当時ミュンヘンのカタログという意味で、ミュニツヒカタログと呼ばれたものです(図14)。

これら大著によって、世界の甲虫がカタログで属まで一旦まとまったことになり、ヨーロッパの

Catalogus Coleopterorum



図14. ゲミンガーと Haroldの世界的甲虫カタログ。

研究者が外国のものを記載するときの種本ができたわけです。従って、たとえば、オーストラリアとかニュージーランドで記載された新属などは、このラコールドールの体系にはめ込みながら読むとよくわかるし、東南アジアのものも同様です。

フォーラが1912年に「Fauna of British India」で示した甲虫の分類体系が、しばらく世界の甲虫の分類体系のスタンダードになりました。また、ユンクのカatalogというものが出来まして、1910年に第1冊目、セズジムシ、1940年170冊目の総索引で完結しました。

この第170冊の索引を見れば、ユンクのカatalogに出てくる甲虫の属とか分類体系とかというのが全部わかるようになっていますが、ドイツが戦争ということもあって、この巻は非常な貴重本で、私もずいぶん苦勞してやっと手に入れました。

その次に、1924年～1932年にウィンクラー(Winkler)の旧北区のカタログが来ました(図15)。これは、単に、種名と雑誌の出典だけで非常に簡単なものですが、旧北区の中に台湾から中国まで含めておきますので、当時の日本の甲虫が、台湾も含めてどういう具合になっているかというのを知るには、絶好の情報源でした。従って、北隆館で出た昆虫図鑑とか当時の甲虫関係の出版物では、配列順がウィンクラーの目録順になっています。

これは、ヨーロッパの甲虫がまとまったものですが [Genera des Coléoptères d'Europe], 1850何年かの当時の図版としては、実に見事なカラーの図版が付いています(図16)。

代表的な甲虫が全部それに出ています。そして、ちょっと私の写真が悪いですが、こういうところに、細かな部分図がいっぱい付いていて、顕

Catalogus Coleopterorum regionis palaearcticae

Editus ab Albert Winkler

Wien, 1904-1902 Albert Winkler XVIIII, Dittgenasse 11



図15. ウィンクラーの旧北区の甲虫のカタログ。

Table of contents for 'Catalogus Coleopterorum regionis palaearcticae' listing various beetle orders and their page numbers.

微鏡が全然発達していなかった時代というのに、いわゆるルーペに毛の生えたようなものを使用し、一生懸命、部分図を書いてあります。この本は、ヨーロッパのスタンダードになった画期的なものだと思います。

つぎに、これがゲミンガーとハロルドがまとめた、世界の甲虫の初めてのカタログで、簡単なりすと産地だけというものです。これも、貴重な珍本です。このカタログの非常に重要なところは、ギリシャ語由来の属名を変換したラテン語の正しい綴り方に全部訂正したという点です。例えば、シデムシの原綴 *Nicrophorus* を正綴の *Necrophorus*

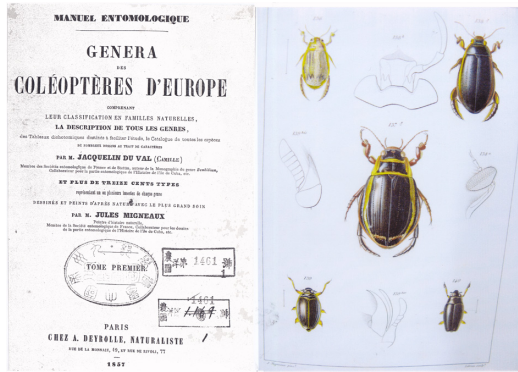


図16. Genera des Coléoptères d'Europe.

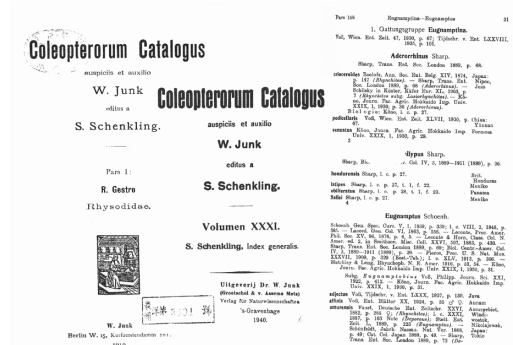


図17. ユンクのカタログ。

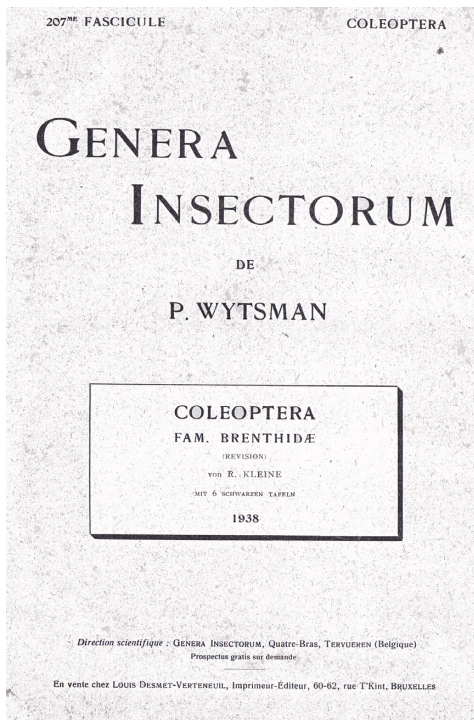
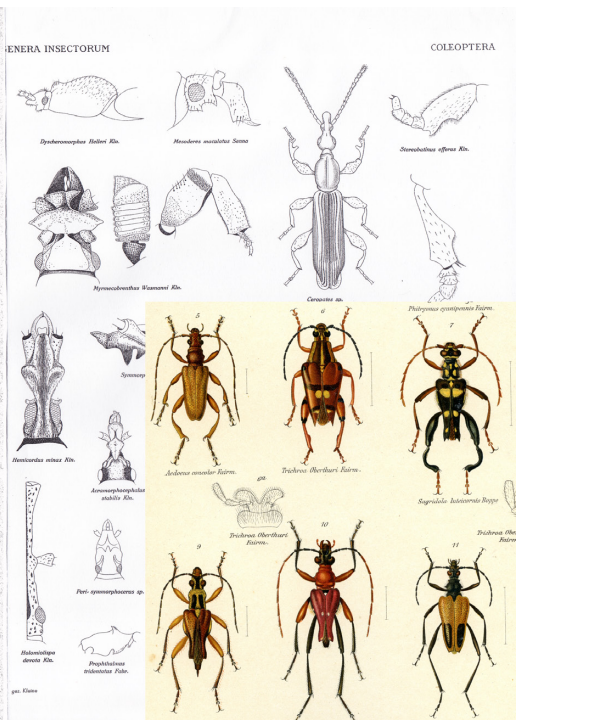


図18. Genera Insectorum.



に変えるというように多くの属の綴りを変更し、またユンクのカタログがそれに従ったために、甲虫の属名にいろんな綴りが出来てしまった訳です。しかし、今の命名規約では、綴りがおかしくても最初の記事に従うということになりましたので、シノニムにたくさんの変更名が加えられることになりました。

これが、ユンクのカタログの2ページを重ねて、1冊目と170冊目を示してあります(図17)。

ユンクのカタログというのは、ちょっと古くなりましたが、その中に当該タクソンに関係するすべての文献があがってきます。これは、最近のカタログにはないことですので、ユンクのカタログは、現在でも非常に大事な情報源です。つぎに、ウィンクラーのカタログというのは一見簡単なものですが、日本人にとっては非常に使い勝手の良かったカタログです。これらと別に「Genera Insectorum」というシリーズのものが出ました(図18)。

出版されたのは昆虫の一部分だけですが、属までの検索表、属の記載、および種のリスト、代表的な種類がカラープレートであるとか、白黒のプレートで出ています。これは、ミツギリゾウで、ハナカミキリのカラープレートを一部貼り付けてありますが、こういうけっこう見事な図が付いています。これで、太平洋戦争に入ります。

戦後になりまして、1955年に、クロウソン(Crowson)が、「The natural classification of the families of Coleoptera」という甲虫の科の新しい分類体系を立てました。これは、それまでの知見を統合したものです(図19左)。

その後、ロランスとニュートン(Lawrence & Newton)が、1995年に新しい甲虫の一つの分類体系 Families and subfamilies of Coleoptera を、クロウソンの80歳の誕生の記念出版で提示しました(図

19右)。

これは、完全に分岐分類学の方法に従ったものです。クロウソンの体系は、従来の違うものは分けて、同じものは一緒にするという伝統的な分類と、分岐分類学のちょうど中間的な曖昧な状態ですが、ロランスらははっきりと分岐分類学の立場に立ちましたし、最近 Handbook of Zoology で甲虫が今までに2冊出ていますが、これも、完全に分岐分類学の手法に従っているというのが最近の甲虫の分類の体系でございます。

大林: ということで、実際に、これから、戦後のお話になってまいります。それで、戦後になってまいりますと、実際に上野先生、渡辺先生、森本先生が、お仕事をしながら体験されてこられた時代になると思います。最初にこんなのがあります(図20)。これ、渡辺先生、ちょっとご説明いただけますか。

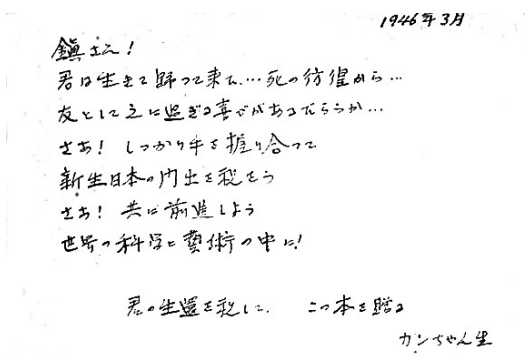


図20. 井上 寛さんが野村 鎮さんに贈った言葉。

渡辺: これはですね、三輪勇四郎さんの「日本甲虫分類学」という本がありますけど、その扉のところに、蛾の大家の井上 寛さん(カンちゃん)が書いて、甲虫の研究家の野村 鎮さん(鎮さん)に終戦後に贈った言葉です。“鎮さん! 君は、生きて帰ってきた... 死の彷徨から... 友としてこれに過ぎる喜びがあるだろうか... さあ! しっかりと手を握りあつて、新生日本の門出を祝おう。さあ! ともに前進しよう。世界の科学と芸術の中に! 君の生還を祝して この本を贈る。カンちゃん生”とあります。井上 寛ちゃんというのは、外人風な風貌でもって、どちらかというと、行動あるいは言動、言う事なんかかなり割り切った、ドライな人との印象を持つ人が多いだろうと思ってんですけど、こういうふうな面があるということを紹介しがてら、戦後になっていよいよこれから、日本

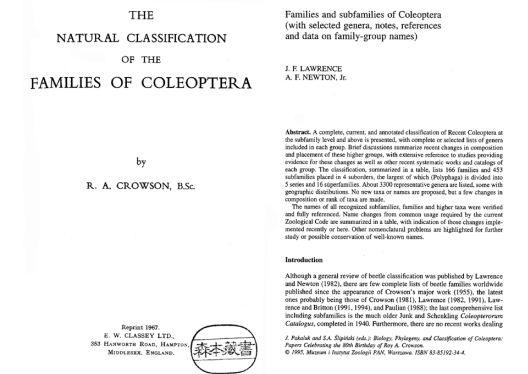


図19. 左: The natural classification of the families of Coleoptera. 右: Families and subfamilies of Coleoptera.

の甲虫、昆虫界が新たな躍進に向かって進んでいく時代に入っていったということでございます。

大林: ありがとうございます。そして、1945年終戦の終戦を待ちかねたように甲虫学会の前身となる“近畿甲虫同好会”が発足いたし、1946年には甲虫学の専門誌、「近畿甲虫同好会報」が発刊されます(図21左)。それから、3年ほど遅れますけれども、1948年には“虫の友の会”が、「昆虫学評論」を1巻1号から出し始めます(図21右)。昆虫学評論のほうは1巻2号まで出て、1950年にはこの2つの会が合併をして、会名は「近畿甲虫同好会」、そして、雑誌名は「昆虫学評論」となりました。ですから、昆虫学評論という名前は、1巻の1号と2号の次が5巻1号に飛んでしまいます。それで、近畿甲虫同好会報は通巻でここに繋がって来ます。一方東京では、1954年に「甲虫談話会」が黒澤先生を中心に発足し、「甲虫ニュース」を発行しはじめました。1960年には、日本甲虫学会の15周年に際して、近畿甲虫同好会が「日本甲虫学会」に名前を変えています。その後、1973年には日本鞘翅目学会のElytraが発刊、1989年にはそのまま鞘翅目学会に引き継がれました(図22)。



図22. Elytraの1巻1号の表紙。

戦後の物故研究者

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 佐々治寛之 | 木元 新作 | 久松 定成 |
| 笠原須磨生 | 馬場金太郎 | 佐藤 正孝 |
| 穂積 俊文 | 中根 猛彦 | 芝田 太一 |
| 林 匡夫 | 黒澤 良彦 | 大倉 正文 |
| 大林 一夫 | 戸澤 信義 | 野村 鎮 |
| 野淵 輝 | 鳥飼 兵治 | 阪口 浩平 |
| 石田 裕 | 下山 健作 | 小宮 義璋 |
| 土生昶 申 | 草間 慶一 | |



図21. 左: 近畿甲虫同好会報, 右: 昆虫学評論。

そして、これらが全部合体して、やっと今年一つになった、というような流れです。

ところで、戦後に活躍をされた、皆さんもよくご存知の多くの甲虫屋さんがもうすでにこれだけ亡くなっておられます。戦後の話はですね、少しいった研究者の方々の思い出も含めて、先生方に思いつくままいろいろお話をさせていただこうと思っております。いかがでしょう、上野先生、少しい話をいただけませんか。

上野: そうですね、ここに名前が挙がっている人たちは、もちろん、みんな知ってますけど、さきほどからの話に出ている、近畿甲虫同好会の話。初めの方ですね、これは、実物をご覧になったことがある方はよくご存知だと思いますけれども、非常に黄色い和紙みたいなものに印刷されているんです。これは林 匡夫、大倉正文という二人のリーダーのほかにですね、伊賀正汎さん、後藤光男さんなど非常に熱心に支えた方々がいて、その後藤さんがどっかでその紙を見つけてきたんですね、それで、こんなものに印刷するの? という話があったんですけども、ほかに紙を得る方法が無い。それで、苦心惨憺して作られたものなんです。今、図書館なんかでも、ちゃんと保存されて持っているとところは少ないと思うんですよ。といいますのは、この紙は、少し日に焼けると、折れちゃうんですね。だから、よほど、大事に保存していないともたない。しかし、その時代を経て、林さんが評論1号を出されたときは、もう少しいい紙が手に入ってますから、こっちはしっかりしています。さっきJ. E. A. ルイスの話が出ましたけれども、この人、神戸にいたんですね。それで、その近くに、矢野由雄という非常な採集の名人がおられまして、その人も戦後ほんとに長い間、いろん

な標本を अच्छこっちから採ってきて、私たちもそれでずいぶん助かったことがあるんですけども、晩年は、箕面に住んでおられて、それもごく電車に近い、入り口に近いところに住んでおられて、お宅がかなり小さい道路の一角にありました。その方達とか、それから林さん、大倉さん達とかみんなわりあい親しい意識がありましてね、それで、どんな情報もすぐ聞こえてくるし、いかにも新しいグループが育っていくというふうな感じでした。その代わりよく舞い込んでこられたのが大林さん、大林さんのお父さんですね。大林さんのお父さんはある意味ずいぶん深く関係されたんだと思います。評論の1号の出版には、そういうふうには私は聞いておりました。具体的なことに関しては、存じませんが、残念なことに。



日本甲虫学会創立15周年
記念大会写真
(1960年10月15日・於大東楼)

図23. 日本甲虫学会創立15周年大会記念写真.

大林:これは、1960年の甲虫学会の15周年のときの写真ですが、森本先生や上野先生も写ってらっしゃいます(図23)。これで見てくださいと、中根先生、戸沢先生、水戸野武夫さんがおられます。後ろのほうには、神谷寛之さん、後の佐々治先生ですね、それから、柴田太一さんだとか、天野昌次さん、これは九州のカミキリ屋さんですけども、こんな方が写ってます。それから、左上の二人目に、お若い頃の森本先生、それから、木元さん、穂積さんも写ってます。右のほうに行くと、上野先生が、上野先生の髪が黒いですね(図24、25)。

上野:まだ若いですからね、このころ。



図24. 図23の前列拡大.



図25. 図23の前列拡大.

大林:1960年の写真です。それから、前列中央辺りが当時の近畿甲虫同好会の重鎮の方々だろうと思います。中條道夫先生、林 匡夫さん、大倉さん、それから、2列目に伊賀さん、それから、石田さん。森本先生、印象の深い方のエピソードみたいな何かございますでしょうか?この辺の方々ど。

森本:そうですね、私も、茶色の紙に印刷された小さな会誌の頃から会に入りまして、中学校1年のころから大倉さんにいろんなことを教えてもらいました。大倉さんが亡くなる前の日に電話をいただきまして、弱々しい声で「あとの雑誌の編集のことをお願いします」とそれだけ言われて、電話が切れました。それが縁で、評論のほうのいろんな編集のことを引き受けるということになりました。それから私、高校のころ、上野さんが高知に来られて、初めてゴミムシを同定してもらったその縁もありました。九大を受験した帰りに、上野さんのところに伺ったこともありましたが、上野さんがいろんな方の

ところに連れてっていただきました。林 匡夫さんの呉服店になんかも訪ねていきました。いろんな人が非常に強い印象として残っております。

上野：半襟の店に行ったんですね、林さんの。

森本：棚にはですね、着物の反物が並んでいて、台の下にはカミキリの標本箱がズラート・・・

上野：そうでしたね。

森本：ええ。そういうところでした。それから、黒澤さんは、山形の高校生のころに、スキーでアキレス腱を切って、それで、兵役義務、昔は、実際兵隊に取られたわけですから、それを免除されて、ちょうど戦争中というのは、どっと若い人が兵隊に取られたことで、九大なんか若い人が居なくなったところに、空襲がいつあるかもしれないと、防空壕要員として、黒澤さんが九大に採用されました。それで、黒澤さんは図書館を守ることが名目ですから、夜通し図書館でタイプライターをたたいて、文献をコピーするということがされました。たぶん、黒澤さんのところには、その当時の写りの悪いタイプライターでたたいた、コピーした文献がたくさんあったことと思います。

上野：さきほど、戸澤先生のお名前がどこかにあったと思いますけれども、戸澤先生は宝塚の図書館の館長をしておられて、その図書館のすぐそばに、昆虫館があって、その館長を兼ねられてたんです。そこへ、これ一度もお名前がでてこないけど、福貴正三さんという方をお呼びになって、それで、実際の標本の管理、その他は、福貴さんがやられてたんですね。戸澤先生のほうはですね、これは、私の父親の同級生だったんで、父だとよく知ってるんですけども、ゴミムシ全体の解説書を作ろうという考えをお持ちで、少しばかり出版されてますけれども、その元になったのがさっきから何度も名前が出てくるフォウラーの「Fauna of British India」の第何巻になるんですかね、巻のはっきりしない出版物ですけども、ゴミムシのところ。それが、出た時にこれを使って日本のものが何とか、新人の人たちにも分るように出来ないかと言うんで、その解説を書こうという気持ちになられたというふうに私は聞いております。

渡辺：この物故者の中で一番印象深い、印象が強いというのは、馬場金太郎先生という気がする

んですけども、ご承知の方も多いだろうかと思いますが、とにかく、虫好きでもって、「虫きち」という本を出すくらい虫が大好きな方です。それで、新潟県の、とにかくファウナをまとめたということでもって、それぞれの family の専門家を自宅に招いて、泊りがけで一緒に採集に行くんですね。それで、採集品をリストにまとめて、新潟の昆虫の目録を作るというようなことでした。私がハネカクシの採集に行ったときは、いろいろなことがありましたけれども、一つおかしかったのは、ハネカクシのことですから、腐肉ですとか、糞ですとか、そういうところにくるわけですけど、そこにしゃがんでですね、一生懸命、虫を採るんです。夏の暑いときですから、額に汗じゃなくて、頭に汗をかくんですね、馬場先生は。そこへアブがぶんぶん飛んでくるわけです。それを一生懸命手でもって追い払いながら虫を採っていた姿を懐かしく思い出します。それから、ご自宅に泊めていただいた時は、ちょうど天皇の植樹祭の後で、天皇にご進講をしたんだということでもって、なにか非常に嬉しそうな顔をして、その進講の様子を奥様に聞かせていられたのが印象に残っています。奥様はたしか八千代さんというんで、新潟で昆虫学会大会を開いた時に、小山さんが流行歌の王将の文句にあわせて、“女房の八千代”という替え歌を作って、それを大会新聞に載せたのを今でも覚えてます。

森本：馬場さんの話であれですが、かつて、京浜昆虫同好会誌でオサムシの調査の機運が高まった頃、石川良輔さんなんか研究を始める前後のところですが、その連中がサドクロナガオサというのを採りに行こうということで新潟に行ったら、それを馬場さんが聞きつけて、長年苦労して俺が探しているのに、ああいう連中に採らしてはなるものかと、じゃんじゃん酒を飲まして酔い潰して、とうとう佐渡に渡らせなかったという話を、馬場さんが得意になって、私にしてくれました。

上野：この物故者の中に、阪神の大震災でなくなった方がいらっしゃる。数人あるんですけどもね、下から2人目の石田 裕さん。これは、家がつぶれて、ご本人も押しつぶされて亡くなったんですね。大倉さんは、これは、直接に衝撃を受けて亡くなったのではないんだけど、地震のあと内臓の具合がだんだん悪くなって、そして、亡くなるに至る。倉本さんの半年前ぐらいですかね？それからね、芝田太一さんは、これは、標本をや

られたんですね、たしか。私、あんまり詳しく知らないんですけど、林さんあたりがご存知かもしれません。それから、あの地震は、関西の虫屋さんにとっては、相当大きいショックを与えた事件だったろうと思います。私は、幸いといったら申し訳ないですけど、東京にいましたから、数日後にこっちのほうへ来る用事があって、宝塚から西宮北口まで、回って見たんですけども、あんまり悲惨な状態でほんとに驚きました。

森本: その地震のことですが、関 公一さんという、戦争中から戦後にかけてカミキリを研究した方ですが、その方の家も影響を受けて、書棚がぶっ倒れたそうです。それで、ぶっ倒れた中にカミキリだとか甲虫の本だとかいろいろありまして、九大に寄贈していただきました。それで、さきほどの台湾の目録に、関 公一と蔵書印がありましたが、それと一緒にいろんな手紙だとか、いろんな紙切れがたくさん一箱に入っていました。その中に、関さんのカミキリ関係別刷と一緒に、例えば、水戸野さんの「何とかと何とかを借用します」というカミキリの古い珍文献借用書なども含まれていました。

渡辺: さっきの、戦前の話と関係しますけれども、大林一夫さんがガロアの家を訪問したんですね。それで、ガロアとの対談記というのを関西昆虫雑誌に書いています。1938年になりますから、たぶん、大林(延夫)さんはまだ、生まれてないのかもしれないけれども、これを読みますと、ガロアというのは、相当、豪放磊落な人物だったらしいんですけども、その状況は今から考えると、ほんとに信じられないような状況なんです。例えば、虫を刺すにも標本箱が無い。しかも、針も日本には無いというんで、その当時、ガロアが持って来ていたのは、金の針と銀の針と銅の針。その銀の針でチョウチョなんかを刺して、箱が無いので、どこに入れておくかという、ビール瓶の蓋ですね。その当時のビール瓶は、今のワインと同じように、コルクの栓がしてあって、そのコルクのビール瓶の、一本のビール瓶の上に1匹チョウチョが刺さってる。もちろん、それは、展翅をしてなくて、刺して置いておく。それらをズラーとビール瓶の上に並べてある。というふうなことで、何日かしていってみると、もの見事にみんな虫に食われて、針だけが残ってたというふうなことが対談記に書かれてました。

大林: ありがとうございます。ところで、保育社の甲虫図鑑が出たのが1980年頃でしたか。実は、あのときの執筆者のかなりの方が、この物故者の中にいらっしゃる。佐々治先生、木元さん、久松さん、佐藤さん、笠原さん、林さん、黒澤さん。あの図鑑が出てからもうずいぶん経っていて、中身もずいぶん古くなってただけでも、じゃあ今、若い人たちでこのような甲虫図鑑を新しく作れるだろうかという話がよく出るんです。けれども、いや、今は無理だろうという話になってしまいます。甲虫学会としては、これから若い人にどんどん育てていただかなきゃいけないし、そういう意味で、現在の甲虫学会の人たちも含めて、甲虫界の現状と、それから先輩として、将来に期待をするようなお話をここから進めていきたいと思うんですけども、いかがでしょうか。

森本: ヨーロッパだとかアメリカでは、昆虫分類学の本は、検索表が中心となってできているわけです。日本では図鑑がたくさん出て、絵合わせで手っ取り早く同定したいという希望という習慣があって、研究者や同好者の皆さんが考えておられるのは、全部の種類を綺麗な図で入れた図鑑を出したいということではないかと思います。実は、外国の研究者が日本の図鑑や業績を見るとき、きちっとした検索表が付いているというふうなものを非常に欲しがっています。図鑑の日本語を一生懸命翻訳して、なんとなく分ったような分らんようなという所があるという話を聞きます。日本の甲虫もかなりわかってきていますし、研究者も結構多いですが、ただ、大学関係、プロとしての従来のそういう分類をやるというポジションというのは、なかなか昔から増えておりません。その代わり同好者のレベルが、非常に高くなってきております。だから、学会の将来目標として、意図的に情報源または種本となるような、例えばアメリカでの、アーネットの本2冊に匹敵するようなものが欲しいですね。日本では、保育社の図鑑とあとはそれぞれの人が出したもので部分的に調べることが出来ますが、甲虫全体としてのものは不完全で残念です。その理由の一つは、標本と文献がどこそこへ行けば見られる、という研究の中心というのがあちこちにある、なかなか1ヶ所がないということがあるかも知れません。文献なんかも、今の時代ですから、CDに入るとかなんかの格好で、私たちのときのような苦勞をしなくても済みますし、画像にしてもカラーフィルム時代とは違っていろんな画像が撮れるようになって、

簡単にやり取りできるようになってきましたので、学会として新しい方針で本かデータベース的なものをなんか考えてはと私は思っています。

大林: ありがとうございます。上野先生いかがでしょう。

上野: 全く同感です。私も森本先生がおっしゃったようなことが実現すれば、これほどうれしいことはないと思うんです。ただ、コピーをとるのは非常に楽になりましたけれども、それを読みこなすのには、やっぱり、それぞれの方が勉強されるよりしょうがない。英語一つにしてもですね、他の人の書いたものを読んでいるときにそれが、自分の身につけていかなければ、いつまでたっても、どっかで足踏みすることになりますので。外国語は、あまり馬鹿にしないで、特に今の若い方は、英語以外の言葉をほとんど勉強されないんですけども、少なくとも、5つか6つの外国語はなんとか読める程度の努力は願いたいと思いますね。私、さきほど、ご紹介させていただきたいときにもちょっと話に出ましたけれども、かなり長い間、ほとんど過去50年くらい、何かの雑誌の編集にあたってました。おそらく、何万ページといういろんな方の原稿を読んだと思います。それを見ると今の世の中すぐ分るんですね。ずいぶんと、歯がゆったらしい思いをしたことがありますので、これは、若い方をお願いしたいと思います。

渡辺: 1962年頃だったと思いますけれども、北隆館から分類図説というのができましたね。甲虫は中根さんのオサムシだけしかないと思うんですけども、その分類図説の出版にあたっては、井上寛さんがちょっと書いてることがあるんです。保育社でもってチョウの図鑑を原色で出し、その改編が行われていた。一方、北隆館は昔から、“図鑑の北隆館”というふうな誇りを持っていた。そういう北隆館がですね、まさに、蛾の図鑑を出版しようという話を持ちかけた。しかし保育社でもその当時蛾の図鑑が企画されていたので断ろうと思った。ところが、執拗に北隆館からの誘いがあるので、それだったら、経済的な採算ベースには乗らないという分類図説を出版するならば、蛾の図鑑を引き受けるという条件を出して、分類図説の出版がなされた。というふうなことが書かれています。結局、オサムシだけしか甲虫関係では出ませんでしたけれども、ああいうふうな分類図説がいろいろな科で出されるようになれば、今より

もはるかに昆虫に関する研究が進んでいくんじゃないのかなというふうな気がしますし、ぜひ、採算性を無視しても、そういう出版をしてくれるような出版社があれば、ありがたいなというふうに思っています。

大林: このスライドは森本先生に準備していただいたんですけども、分類学的手法もだんだん進化をしてきて、変化をしてきて、これからだんだん難しくなるのか、楽になるのか、研究手法の発達も含めて、今後の甲虫学研究の展望みたいなものを何か。

分類学の研究手法の変遷

第1期	伝統的分類学 双眼実体顕微鏡の発達
第2期	分岐分類学 コンピューターの発達 情報処理, 解析
第3期	分子分類学の導入 分子分類学手法の発達

森本: 今はですね、双眼実体顕微鏡というのは、どこにでもありますが、私が学生のころというのは、九大の昆虫の部屋でも、学生の使える実体顕微鏡というのは2台しかなく、しかも、1台は焦点が狂ってるという代物でした。当時は非常に高価なものでした。1930年代になって、初めて実体顕微鏡が欧米でも実用化されて、それで、ベービン・クライヘッド (Böving & Craighead) の幼虫の本が出たりとか、解剖して、細かな特徴を使ってという論文が、そのころから急に多くなり、それで、クロウソンの分類体系本が出るということになった訳です。そこへ、分岐分類学というのが入ってきました。分岐分類学というのは、実際に自分でやられた方はご存知だと思いますが、とにかく、分類形質というのをきちっと選び出して、それで、形質の分布表を作ったうえで、解析をやっていくわけです。それで、解析というのにコンピューターが入ってきました。この分岐分類学の良い点は、分類形質をきちっと見るということですが、欠点として、分岐関係そのものを分類体系にしようということになってきましたので、原始的なグループというのは、どんどん分けて、残りがでっかく残るということ、および、分類形質というので形質を取り上げるその人の能力によって、

形式はいかにもきちっと形質分布表ができて、コンピューターを使って解析されたとしても、実態は実につまらん形質を取り上げているというような論文もたくさんございます。そういうところに、この分子分類学が導入されてきました。しかしながら、甲虫全体の系統というのは、今までの情報に関する限り、この分子分類学が入ってきてから報告された大きな分類体系というのは、クロウソンのころからあんまり変わっていないようですね。また、最近では、分子情報をバーコードとして、だれでも、調べればすぐ名前がぱっとわかるような、そういうことを主張している人たちもでてきました。そうなると、本当の分類学者はいらなくなるわけですね。誰でも同定できるということになる。ただですね、それほど分っている分類群があればの話です。甲虫みたいにまだ、これから何倍にも増えそうなグループだということに、ぱっとこれで、バーコードでこれだといって、それがそうだということを誰が判断するかということですね。まだ、知られてない種がうんとありますからバーコードというのを甲虫で適用できるグループというのは今のところまだ限られているかなと思ってま

す。それから、分子分類学で、例えば、Carabidae の分類は、非常に良い業績があげられたのですが、Carabidae の科全体の分類体系の論文を見ていますと、ある部分のところだけ早く置き換わりが起っていていくということがあって、何となくうまくいかないと、そこを除いてしまえば、今の分類体系と非常に整合がいいんだけど、そこを除くというのがどうも人為的なことになるというようなことがあります。だから、このところは実は、従来の分類体系が十分に研究されたグループの上に分子分類学が入ってくると、非常に効果が大きくなるだろう、と私は思っております。

大林: どうもありがとうございます。今日は会社が不慣れで、十分な打ち合わせもできていなかったもので、スムーズな運びにはなりませんでしたが、そろそろお約束の時間が来ております。3先生方ありがとうございました。これで、今日の座談会を閉めさせていただきたいと思っております。

【短報】屋久島産コクヌスト科2種の記録

コクヌスト科の種は、オオコクヌスト以外はどれも採集が困難で、ハロルドヒメコクヌストはやや少なく、ケマダラヒメコクヌストはさらに少ない種のようなのである。

筆者は屋久島産の以下の2種の標本を見出したので報告する。岡留(1973)、中根(1985)、および屋富祖(2002)によると、これら2種は屋久島未記録と思われる。なお、種の同定は、宮武(1985)を参考とした。

ハロルドヒメコクヌスト *Ancyrona haroldi* Reitter
1ex., 鹿児島県熊毛郡屋久町原, 25. V. 2003, 向山敬延採集。

ケマダラヒメコクヌスト *Ancyrona shibatai* Nakane
1ex., 同上, 17. V. 2003, 向山敬延採集。

標本を提供していただいた向山敬延氏、これらの種についてご教示いただいた平野幸彦氏にお礼申し上げる。



図1-2. 屋久島産コクヌスト. 1, ハロルドヒメコクヌスト; 2, ケマダラヒメコクヌスト。

引用文献

- 宮武睦夫, 1985. コクヌスト科, p. 150. pl. 24. 黒澤良彦ほか, 原色日本甲虫図鑑 (III), 保育社, 大阪.
中根猛彦, 1985. 屋久島に産する甲虫類について, pp. 587-631. 環境庁自然保護局編, 屋久島の自然.
岡留恒丸, 1973. 屋久島の昆虫相. 179 pp., 7 pls. 屋久島教育委員会.
屋富祖昌子ほか編, 2002. 琉球列島産昆虫目録増補改訂, 沖縄生物学会.

(兵庫県西宮市 田中 稔)